

「薄明時」に想う花の色

中嶋 芳雄 富山大学

5月、6月は一年中で草木が最も生き生きと芽吹き、新緑が眩しい季節といえる。またこの時期は、草花が互いに競い合うように咲乱れる季節でもある。まさに百花繚乱の季節といえよう。自然の豊かな郊外は元より、コンクリートやアスファルトに囲まれた都会においても、街路樹や舗道脇に植えられた草花などは、われわれに季節感を与えてくれる。

ところで、季節を運んでくれる花々も、見る時間帯の違いにより、その色合いは微妙に変化する。すなわち、花を観測する視環境の明るさのレベルの違いにより、色調が異なってくるのである。これは、観測するわれわれ人間の眼の順応状態の違いによって、色覚特性が変化するためであり、プルキンエ・シフト現象と呼ばれている。このプルキンエ・シフト現象は、注意深く観察していれば、日頃誰でも経験することが可能である。たとえば、青色あるいは紫色（いずれも白色を含んだ白っぽい色調の方が効果は大きい）をした花を昼間注目しておき、それを夕方再び観測し、比較すればよいのである。舗道脇の街路樹の下に植えられている“すみれ”や、白味と青味を多少含んでいる“つづじ”や“さつき”などは格好の観測対象といえよう。

プルキンエ・シフト現象は、花でなくても、青系統の看板や建物あるいは自動車の車体に対しても観測することができる。あるいは、青色の交通信号灯でも十分観測可能である。

ところで、このプルキンエ・シフト現象が生じている時間帯は約15～30分程度であり、夕方では、自動車の前照灯を点灯し始める時間帯ともほぼ一致している。周囲の外界が何となく白っぽく感じられるのもまたこの頃である。

読者の皆さんもぜひ、常日頃より青色や紫色に注意を払い、このプルキンエ・シフト現象の観測を試みていただきたい。そしてそのときに、網膜内では昼間十分に働いた錐体から夜間用の桿体へと、活動組織が移行しつつあるのだなということを感じていただきたい。

ラベンダーのくれたもの

齋藤 美穂 早稲田大学

夏の出来事である。車は北海道特有のひたすら真っ直ぐな道をニセコの宿めざして走り続けていた。途中の道草で思わぬ時間をとられ、何時しか辺りはもの静かな明るさにつつまれていた。久々のカーブを曲がった丁度その時である。いままで続いていた緑の草原の彼方に、何とまたとえようのない鮮やかな空間が飛び込んできた。近づいてみて知ったその空間の正体は、遅咲きのラベンダーの花が群生している畑だった。少し出遅れた夏休みの旅行に、きっとラベンダーには出会えないだろうと気落ちしていた私にとっては大変な贈り物であったが、何よりも嬉しかったのはラベンダーの穏やかな青紫色が、まるで光輝く様に強烈なインパクトを与えたという事である。所謂プルキンエ現象を目の当たりにした事実である。このせわしない日常生活の中ではプルキンエ・シフトの様な生理学的変化が起きていることすら気づかずに過ごしてしまっている。しかしその時の色の美しさは、言葉ではとうてい表現しきれない、と言うより言葉にしましてはもったいない様な気がしてしばらく胸の中にしまっておいた。

しかし、とうとう堪えきれなくなって最近の講義ではこの北海道で遭遇した幻想的な体験の事を話している。すると何人かの学生はテストの答案用紙の最後の余白に感想を述べてくる。「私もそんな色に出会ってみたい」と。どうやら私は薄明視下の色の魅力に思わず熱っぽく語っているらしい。しかしおよそ美術を志し色彩に携わろうとしている者には、この現象に一度は魅了されてみてほしいと願うのである。

